

国語教科書の教材に関する一考察

One Consideration on Teaching Materials of Japanese Language Textbook

田村正彦

Masahiko Tamura

キーワード：国語、古典、地獄 蜘蛛の糸 平家物語

はじめに

「地獄」とは、基本的にどの宗教にも見られる、普遍的な概念である。洋の東西を問わず、この世で犯した罪をあの世界で償う場所として、古くから恐れられていた。日本では、仏教の伝来とともに知られるようになり、奈良時代、平安時代を通じて、主に唱導によって広まっていった。その広がりには、平安時代末期の仏教説話集『宝物集』に、次のように記されている。

六道しらぬ人や侍る。この世に、五六の子どもや、あやしき下衆どもぞしりて侍るめるは。(巻二) (注一)

地獄を含む六道の世界を知らない人はいないといい、年齢や性別を問わず、五六歳の子供までもが皆知っているとある。この時期、すでに地獄の概念が日本人にとつての共通理解として定着していたことが知られるのである。

では、現代の子供たちは、どのように地獄の世界観を身につけていくのだろうか。本稿では、地獄を舞台とした作品を、絵本、そして児童文学の順に取り上げ、その上で、高等学校における教材としてふさわしい作品とその意味を紹介してみたいと思う。

一、絵本の中の「地獄」

地獄や閻魔さまを題材とした絵本は、枚挙にいとまがない。子供向けということもあり、多くは楽しみながら読めるような内容となっている。ここでは、まず、田島征彦氏による『じごくのそうべえ』(童心社)を取り上げてみよう。この本の初版は一九七八年と古く、現在は一四二刷(二〇一八年十二月十七日)まで版を重ねている。広い世代にわたって読み継がれているベストセラーといえよう。内容については、絵本の中にも記されているが、落語の『地獄八景亡者戯』(注二)のストーリーを子供向けにアレンジしたものであり、その梗概は次のようなものである。

軽業師の「そうべえ」が綱渡りを失敗しあの世へ旅立つ。途中、医者と山伏と歯抜師の三人に出会い、行動を共にする。閻魔王の裁きでは、この四人だけが地獄へ墮とされることになり、糞尿地獄、人呑鬼、熱湯の釜、針の山と、次々に責めを受けるが、この男達はいろいろな技を駆使してすべての責めを免れてしまう。とうとう困り果てた閻魔王が四人を地獄から追い出すと、「そうべえ」をはじめ、全員がこの世に蘇ったのである。

地獄で亡者達が暴れる話は、中世後期から見られ、源義経が地獄で反乱を起

こしたり（『義経地獄破り』）、朝比奈三郎義秀が閻魔を手玉に取ったり（狂言『朝比奈』）と、主に武士たちの地獄めぐり譚から始まった。時代とともに、地獄は恐ろしい場所ではなくなっていくたのである。そしてそのような地獄の形骸化を受け、近世には地獄の滑稽化へと進展してゆくのである。ちなみに、三人の男が地獄で大暴れる話は、元禄期の噂話を集めた『元禄世間咄風聞集』に「神子よみちかゑり地ごく咄之事」としてすでに見られる。やや長くなるが、全文を引用してみよう。

ある神子ふと相果、ちごくに落候道にて男老来り申候付、「其方はいづくの人に、いか成るとが有之ちごくに落候や」と神子尋候。かの男申候は、「我等儀せう用けんと申者にて候が、しやばにては刃の上をあるき、色々はうかつかまつり渡世いたし候者にて有之候が、何のとがともなくちごくに落申候。つれ立可申」由にて同道いたし候処に、又男老来り、「我等事しやばにて人の齒をぬき世を渡り申候が、何のとがもなくケ様に地ごくに落申候。さらば同道いたし候半」とて、三人つれ立地ごくに落申候。ゑんまわうをはじめ、其外あを鬼・赤をにども、「罪人来りたり」とよるこび、すなわち、「ねつとうに入候半」といたし候。かの神子、「まづ御まち候へ」と、しやばにてのごとく水のいんをむすび、三人ともねつとうに入候へども何事も無之、罪人ども、「ひさしく行水いたさず候に、しやばゆらい」とてよるこび申候。をにども、「さらばつるぎの山にのぼせよ」とて、三人の罪人を、「のぼれく」とせめ申候。其節しやばにて刃の上をありき申候男、「心得申候。我があとにつき御のぼり候へ」と、かのじゆつを出し候へば、何の事もなくのぼり申候。罪人ども、「ひさしぶりに行水はいたし候。つるぎの山にのぼり気をはらし候」とて、ひとしをよるこび申候。鬼どもせめあぐみ、とりく評定いたし候ところに、こかしき鬼申候は、「もはやすべきやうなく候間、三人ともにくひころし候はん」と申候。のこりのおにども、「尤」とて、つるぎの山より追おろし、くひころさんといたし候。そのときかの齒ぬき、「こゝをば我にまかせよ」とて、本より齒ぬきの上手なれば、手を一打うち申候へば、鬼どもの齒みなおち申候由。右は御同人様御咄也。（注三）

おそらく、これが落語の『地獄八景亡者戯』の原拠のひとつであろう（注四）。このように、古くから語り伝えられた滑稽譚が、落語、絵本として現代にも息づいているのである。

一方、地獄の恐怖をストレートに説いた絵本も存在する。『絵本地獄』（風濤社）である。一九八〇年に刊行されたこの本は、延命寺（千葉県南房総市）に伝わる『地獄極楽絵図』（江戸時代・十六幅）をもとにした絵本であり、非常におどろおどろしい場面が続く絵本として知られている。この絵図は、全体としては、ある女性の死から始まって、十王の裁判を受けながら地獄を遍歴し、最後は極楽浄土にたどり着く、というストーリーのもとに構成されている。つまり、恐怖と救済の両面を備えた物語なのである（注五）。しかし、絵本では恐ろしい場面だけを切り取っている。その意図するところは、絵本の末尾に、

死を恐れることのない子供らが育っていくとしたら、こんなにこわいことはありません。

とあるように、敢えて残酷な地獄の場面を見せることで、子供たちに死の恐ろしさを伝えようとしたのであろう。そして、この絵本の恐ろしさは、近年、東村アキコ氏の『ママはテンパリスト』という子育て漫画（注六）で紹介されたことをきっかけに、再び注目されることとなった。具体的には、この漫画が「子育てに役立つ」として、テレビやラジオ、新聞、雑誌などで相次いで紹介され、一大ブームを巻き起こしたのである。要するに「悪いことをしたらこんな地獄に落ちるんだぞ」という脅しである。もちろん、脅してしつけをすることが、果たして教育として正しいかどうかは議論のあるところだが、「悪いことをすると地獄に落ちるよ」とか、「嘘をつくと閻魔さまに舌を抜かれるよ」などという戒めの言葉と何ら変わるところがないこともまた事実である。

二、『蜘蛛の糸』

絵本に続いて、児童文学にあらわれた地獄として、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を取り上げてみたい。この作品は、大正七年（一九一九）七月、雑誌『赤い鳥』創刊号に発表された、芥川にとつて最初の児童文学であった。二八〇〇字ほどの短編であったが、戦前戦後を通じて多くの学校教科書に採用され、また、近年では作品を読み込むための教材としては姿を消してしまっただが、児童向けの小説をはじめ、絵本や紙芝居の題材にも取り入れられ、誰もが知る名作となっている。

さて、この物語を読むときに、子供たちはすでに地獄の世界のことを知っているはずである。それは、先に述べたとおり、絵本等による幼児期からの教育の結果であろう。そして、悪いことをすると地獄落ちる、という道徳観念もこの作品

を鑑賞する前提として、すでに備わっているのである。

では、この作品からは何を学べよのだろうか。つとにこの作品の主題として挙げられるのが、人間のエゴイズムである。極悪人犍陀多の、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼつて来た。下りろ。下りろ（注七）」という台詞は、彼のエゴイズムの象徴であるが、しかし、考えてみれば、人間が利己的なのは当たり前である。まして、命の危機にある場面であれば、他人を押しつけてでも生き延びようとするのは当然であろう。だからこそ、この作品を読む者は、みな、犍陀多に自分を重ねてみてしまうのである。したがって、この作品の主題を「エゴイズムから逃れられない人間への不信」などとするのは的外れであり、むしろ、芥川が描きたかったのは、そのような闇を抱えた人間にも与えられる、一筋の光なのではないだろうか。例えば、次のような犍陀多の説明にも、そのことはあらわれている。

この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。

極悪人でさえ、善なる心は備わっているものだ。それが人間の素晴らしさであり、また、闇を抱える我々人間にとつての救いなのではないだろうか。

あるいは、次のような場面も、端的にそのことを示している。

何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めると、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。

助かるかもしれない、という一瞬の歓喜は、一貫して犍陀多の視点で描かれている。そして、それを象徴する「蜘蛛の糸」は、まさに、絶望の淵にあった男にとつての一筋の光明だったのであり、そこにこそ人間の存在意義は認められるべきではないのだろうか。

一方、人間の対極にある釈迦はどうであろうか。極楽をぶらぶらと散歩している途中犍陀多を見つけ、気まぐれに蜘蛛の糸で助けを出し、その失敗を見て浅ましく思い、悲しげな顔をした、とある。恐らく釈迦は、犍陀多が失敗するのを承知の上で蜘蛛の糸を垂らしのであろう。だとすれば、この物語に見られる「御釈

迦様」は、仏教思想で説かれる釈迦とはまったく別の存在と考えなければならぬであろう（注八）。芥川は、決して「御釈迦様」を仏として描いたのではないのである。

少し話はそれるが、この犍陀多と釈迦、あるいは地獄と極楽の対比は、『竹取物語』の人間と天人の描き方に似てはいないだろうか。『竹取物語』は、天人として生まれたかぐや姫が、人間の世界で生活し成長することで、次第に「心」を身につけてゆく物語である。天人は心が無く、喜怒哀楽を持たない存在であるが、かぐや姫は、物語の最後で、次のような歌を残している。

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける（注九）

求婚を断り、地上を辞することを帝に伝える手紙に添えられた歌であるが、人間の複雑な心を象徴する「あはれ」という感情を抱えていることが知られよう。これは、天人としてはあり得ないことであり、ここに至り、かぐや姫はまさに人間になったのである（注十）。しかしながら、その直後、かぐや姫は天人に戻ってしまう。

ふと天の羽衣うち着せてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。

天の羽衣を身に纏うと、翁を愛しいと思っていた心が一瞬のうちに消え去り、振り返ることもなく天に昇っていったのであったのである。迎えるの天人は、人間の世界を「穢き所」として忌み嫌うが、その穢き世界で喜怒哀楽とともに生きる人間の方が、心を持たない天人に勝っていると、作者は言いたのであろう。

この一見すると人間の浅ましさを描いたように見えて、実は人間を肯定的に捉えようとする姿勢こそ、芥川の『蜘蛛の糸』の主題に関わるものではないだろうか。地獄でもがき苦しむ犍陀多と、それを冷淡に傍観する釈迦の対比によつて、そのことはより鮮明になるのである。

三、『平家物語』

現在、高校生の国語教材の中で、『蜘蛛の糸』に続くような作品はあるだろうか。残念ながら、地獄を舞台にして「人間とは何か」といったことを深く考えさせるようなものは見当たらない。そこで、ここでは、ひとつの提案として、教材としてもよく知られた『平家物語』の中から、それに相当する場面とその意味に

ついて考えてみることにしよう。

『平家物語』は、平安末期に勢力を誇った平家一門の栄枯盛衰を描いた一大叙事詩であり、平家の滅亡後、琵琶法師たちによって語り継がれた無数の物語が、徐々に成長し体系化していったものである。その中には、地獄の世界を取り上げた場面もいくつか見られる。

入道相国の北の方、二位殿の夢に見給ける事こそおそろしけれ。猛火のおびたしくもえたる車を、門の内へやり入たり。前後に立たるものは、或は馬の面のやうなるものもあり、或は牛の面のやうなるものもあり。車のまへには、無といふ文字ばかり見えたる鉄の札をぞ立たりける。二位殿夢の心に、「あれはいづくよりぞ」と御たづねあれば、「閻魔の庁より、平家太政入道の御迎にまいって候」と申。「さて其札は何といふ札ぞ」とはせ給へば、「南閻浮提金銅十六丈の盧遮那佛、焼ほろぼし給へる罪によつて、無間の底に墮給ふべきよし、閻魔の庁に御さだめ候が、無間の無をかゝれて、間の字をばいまだかゝれぬなり」とぞ申ける。二位殿うちおどろき、あせ水になり、是を人々にかたり給へば、きく人みな身の毛よだちけり。(注十一)

これは、平清盛が高熱にうなされ、瀕死の状態にいるときに、妻である平時子(「二位殿」)が見た夢である。獄卒が引く火の車が門の内へ入ってきたので、そのわけを尋ねると、閻魔王の命で清盛を迎えに来たといひ、その罪は、南都焼き討ちで仏像を焼いたからだと言げられる。そして、清盛は、程なく「閻絶躰地」した挙げ句に「あつち死に」した。やはり「悪いことすると地獄に墮ちる」という教訓がここにも生きており、獄卒や火の車、閻魔王などは、絵本や紙芝居で慣れ親しんだ地獄の世界であるといえるだろう。

一方、そのような、子供の頃から知っている地獄とは別に、『平家物語』にはまた別の「地獄」が登場する。

同五月十二日午剋ばかり、京中には辻風おびたしう吹て、人屋おほく顛倒す。風は中御門京極よりをこつて、末申の方へ吹て行に、棟門平門を吹ぬきて、四五町十町吹もてゆき、けた・なげし・柱などは虚空に散在す。椀皮ふき板のたぐひ、冬の木葉の風にみだるゝが如し。おびたゝしうなりどよむ事、彼地獄の業風なり共、これには過じとぞみえし。たゞ舎屋の破損するのみならず、命を失なふ人も多し。牛馬のたぐひ数を尽して打ころさる。是たゞ事にあらず、御占あるべしとて、神祇官にして御占あり。「いま百日のうち

に、禄ををもんずる大臣の慎み、別しては天下の大事、并に仏法王法共に傾て、兵革相続すべし」とぞ、神祇官陰陽寮共にうらなひ申ける。

これは、治承四年(一一八〇)に京都の街を襲った「辻風」の惨状を記したものである(注十二)。家屋は吹き飛ばされ、多くの人が死傷したとあるが、その光景を「あの地獄の中で吹き荒れる業風であつても、これほどひどくはないだろう」といつている。これは現代でもよく使われる「地獄のようだ」という言い方に近いものである。どうにも表現しきれない悲惨な光景を、地獄に喩えて言つたものである。

同じような表現は、巻五の「奈良炎上」(平重衡による南都焼き討ち)や、灌頂巻の「六道之沙汰」(建礼門院の六道語り)(注十三)にも見られる。ここでは、前者を取り上げてみよう。

夜いくさになつて、くらはさはくらし、大將軍頭中将、般若寺の門の前にうつたつて、「火をいだせ」との給ふほどこそありけれ、平家のせいひのなかに、播摩国住人福井庄下司、二郎大夫友方といふもの、たてをわりたい松にして、在家に火をぞかけたけりける。十二月廿八日の夜なりければ、風ははげしし、ほもとほひとつなりけれ共、ふきまよふ風に、おほくの伽藍に吹かけたり。恥をもおもひ、名をもおしむ程のものは、奈良坂にてうちじにし、般若寺にしてうたれにけり。行歩にかなへる物は、吉野十津河の方へ落ゆく。あゆみもえぬ老僧や、尋常なる修学者兒共、おんな童部は、大仏殿・やましな寺のうちへ、われさきにとぞにげゆきける。大仏殿の二階の上には千余人のぼりあがり、かたきにつづくをのぼせじと、橋をばひいてんげり。猛火はまさしうおしかけたり。おめきさけぶ聲、焦熱・大焦熱・無間阿毘のほのをの底の罪人も、これにはすぎじとぞみえし。

炎から逃げまどう人々の泣き叫ぶ声は尋常なものではなかつたはずである。それを表現する手立てのなかつた語り手は、地獄で苦しむ罪人達を引き合ひに、それにもましてひどいものでした、とまとめているのである。ちなみに「焦熱」「大焦熱」「無間阿毘」とは、八大地獄の中でも特にひどい場所である(注十四)。さて、以上のような場面から、知られることは何であろうか。辻風にしろ、奈良の大火災にしろ、多くの人々が目の前で死にゆく悲惨な場面である。そして、その筆舌に尽くしがたい光景を、いずれも地獄の世界に引き比べて表現しているのであるが、それは言い換えれば、自然災害や戦争によつてはじめて、人々はこ

の世の中にある地獄の世界を目の当たりにしたのである。

実は、このような「譬喩としての地獄」の登場は、この『平家物語』の描写から始まるのである。現代の我々が使う「通勤地獄」や「地獄の苦しみ」といった表現は、平安時代末に起こった自然災害と戦争によってもたらされたものである。

自然災害にしろ戦争にしろ、それは現代にも起こりうるものであろう。記憶に新しいところで言えば、東北地方を襲った東日本大震災がある。当時のニュースや新聞記事などを見ると、生き残った人々の証言の中に、「地獄だった」という表現が多数確認できる。古典文学は、単なる遠い昔の出来事ではないということであり、古典の現代性、というテーマがここに現れるのである。

おわりに

幼児期から高校生に至るまで、教育と地獄の関係性を辿ってみた。絵本などによって地獄の世界を知り、悪いことをすると地獄に墮ちるという道徳観念を学ぶところから始まり、芥川の『蜘蛛の糸』では、エゴイズムをきっかけに、人間とは何であるかを考えることができることを確認した。そして、『平家物語』に至り、自然災害や戦争によってももの見方を変えた古代人と、現代の我々との繋がりを提示してみたのである。地獄というものが教育とどのように関わるのか。本稿が、それを解明するための一助となれば幸いである。

【注】

- 一 新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』、岩波書店、一九九三年。
- 二 落語の『地獄八景亡者戯』は、桂米朝が、江戸時代からあった話を現代に復活させてもので、落語としては異例の一時時間を越える長編である。
- 三 岩波文庫『元禄世間咄風聞集』、岩波書店、一九九四年。
- 四 話の後半部分の原拠は、桂米朝氏の指摘により、『はなしの種』の「玉助めいどの抜道」であることが知られている。
- 五 あるいは、その後半には、いわゆる地獄の休日テーマとした、鬼と亡者が楽しく一日を過ごす姿も描かれている。

六 集英社の『月刊コーラス』に、二〇〇七年から二〇一一年まで連載された漫画作品。

七 ちくま文庫「芥川龍之介全集二」筑摩書房、一九八六年。以下、『蜘蛛の糸』の引用はこれに拠る。

八 これに限らず、本来の仏教思想との矛盾点を指摘する論者が散見されるが、あまり意味のないことのように思われる。例えば、極楽の下に地獄があるのはおかしい、というが、これは、おそらく、地獄絵のイメージから来ているように思われる。すなわち、地獄絵は一幅の画面の中で、極楽を上の方に、そして地獄を下の方に描くことが多いのである。その他の矛盾点としては、釈迦が極楽に住んでいるのはおかしい、というものもあるが、あくまでも子供向けに、わかりやすく書いた作品であることを忘れてはならない。ちなみに、犍陀多が苦しんでいた「血の池地獄」も、本来は女性だけが墜ちる地獄であるという矛盾がある。

九 新編日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』、小学館、一九九四年。以下、『竹取物語』の引用はこれに拠る。

十 物語中盤で石上麻呂足がかぐや姫と結婚するために子安貝を探しに行くが、失敗し、気を病んで死んでしまう場面がある。それを聞いたかぐや姫は「すこしあはれ」と思っただけであつた。おそらく、人間の心がまだ完全には備わっていないからである。

十一 日本古典文学大系『平家物語 上』、岩波書店、一九五九年。以下、『平家物語』の引用はこれに拠る。

十二 京都を襲った辻風の一節は、先行する『方丈記』（鴨長明著・建暦二年／一二二年成立）の記述を参考にしたものと思われる。「また、治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより大きな辻風おこりて、六条わたりまで吹ける事侍りき。三四町を吹きまくる間に、こもれる家ども、大きなも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱ばかり残れるもあり。門を吹きはなちて四五町がほかに置き、また、垣を吹きはらひて隣と一つになせり。いはむや、家のうちの資財、数を盡して空にあり、椀皮・葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に乱るが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず、おびたしく鳴りどよむほどに、もの言ふ聲も聞えず。かの地獄の業の風なりとも、かばかりにこそは

とぞおぼゆる。家の損亡せるのみにあらず、これを取り繕ふ間に、身を損ひ、かたはづける人、数も知らず。この風、未の方に移りゆきて、多くの人の嘆きなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やある、たゞ事にあらず、さるべきものさとしか、などぞ疑ひ侍りし」（日本古典文学大系『方丈記 徒然草』、岩波書店、一九五七年）。

十三

建礼門院の「六道語り」は、自分の人生を六道、すなわち地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天のそれぞれに喩えて回想したものである。その一部を引用すれば、以下のようになる。「天道」あけてもくれても楽さかへし事、天上の果報も是には過じとこそおぼえさぶらひしか。…（中略）…かくてよる方なかりしは、五衰必滅のかなしみとこそおぼえさぶらひしか。

「人道」人間の事は愛別離苦、怨憎会苦、共に我身にしられて侍らふ。四苦八苦一として残る所さぶらはず。「餓鬼道」是又餓鬼道の苦とこそおぼえさぶらひしか。「阿修羅道」修羅の鬭諍、帝釈の諍も、かくやとこそおぼえさぶらひしか。「地獄道」残とまゝる人々のおめきさけびし声、叫喚

大叫喚のほのおの底の罪人も、これには過じとこそおぼえさぶらひしか。

「畜生道」「是はいづくぞ」ととひ侍ひしかば、二位の尼と覺て、「竜宮城」と答侍ひし時、「めでたかりける所かな。是には苦はなきか」ととひさぶらひしかば、「龍畜経のなかに見えて侍らふ。よくよく後世をとぶらひ給へ」と申すと覺えて夢さめぬ」。この中で、地獄道の場面は、壇ノ浦で、母である平時子と息子である安徳天皇が、目の前で入水したときのものである。幼い天皇が海に飛び込んだその光景は、まさに地獄としか形容のできないものであつたのだろう。

十四

『往生要集』によると、八大地獄は、罪の軽いものから順に、等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄（無間地獄）で構成されている。